

〔論文〕

# 対人援助職としての防災教育の発信 —被災地から学ぶリスクマネジメントの定着へ—

長 橋 幸 恵

## はじめに

防災教育には、日頃からその意識を持ち、リスクマネジメントを考えられる専門職の人材育成が望まれる。そこで、前稿「対人援助職としての防災教育の視点—被災地から学ぶリスクマネジメントの初期プログラム—」<sup>1)</sup>は、対人援助職に就く学生の中から、防災に関心を持った学生を選抜し、ボランティアや地域福祉で活躍する将来の人材を教育するための初発的なプログラムを提示した。もし、災害が起こった場合に、率先して災害弱者となる人たちへの支援ができる対人援助職の必要性を痛感したからである。

対人援助職に就く学生には、もしものリスクに備え、どのように行動すればよいのか、知恵を出しあい、その場を乗り切れる能力がなくてはならない。自分たちの住んでいる場所がどのような地域であるのかをハザードマップで確認しておくことなど事前の知識が、防災意識へとつながっていく。もしものときに、とっさの判断ができるかが重要であり、何も経験がない、知識がないでは、防災への意識が育つことはありえない。そこで、対人援助職を目指している学生には、将来的に安全で快適な生活を支え、人命を守ることができる専門職の担い手として、現地に出向き、実際に経験したからこそ考えられることや、備えを聞いてくることで、被災地から学び考えたことを、自分のいる地域や周囲に伝えることが初期プログラムの目的であった。

今年で、2年目になる現地研修では、新たに対人援助職に就いている卒業生にも参加してもらい、リスクマネジメントを考える視点をひろげ、より広範な伝達網を社会にはりめぐらせてゆくことができるかを、後の事例をとおして論じてみたい。

## 1章 初期プログラムの成果

被災地研修1年目の初期プログラムは、大阪市ボランティア・市民活動センター（社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会）平成28年度大阪市ボランティア活動振興基金の助成事業一覧の「生徒・学生の福祉ボランティア活動の基盤整備事業」に申請し、助成を受けることができた。それとともに、初期であったため、学生の経験や学びの導きを被災地の研修先に依存する結果となり、模索状態のまま大きく助けられた。現地の福祉施設や、幼稚園で働いている対人援助職への聞き取り調査と現地の学生の経験談を実際に聞くことが、1年目の被災地研修でのプログラムの組み立ての支柱になっ

た。現地の受け入れ体制があったからこそ、被災地から学ぶリスクマネジメントの重要性に気づき、学生の学びにも繋がった。

今日に至ってなお、東日本大震災の心が癒えることがない中、被災の記憶が風化することがないように防災の向上のために、当時のことを思い出し語っていただいた内容を、できる限り忠実に伝えていくことで、防災意識を広めてゆく契機を作ることが初年度の実態であった。

防災リーダー1期生で平成30年度から社会人になり、対人援助職についての卒業生より防災リーダーとして経験したことを聞いてみた。電話によるインタビュー調査で下記はその感想である。

現在、働いている職場でも、防災訓練をしている。その際、災害が起きた場合に、どこに危険があるかを話す機会があった。実際に東日本大震災を経験している場所に研修に行った経験から、自分から積極的に発言することができている。

研修に行ったときに、仙台白百合女子大学の学生から被災した際に電気が使えなかった。懐中電灯にアルミホイルをかぶせて光を大きくしたという体験と工夫を聞いた。日常生活にある物から非常時での対策を考える必要がある。被災地研修に行ったからこそ、災害を身近に感じて、普段からの防災意識が高まっていることを実感しているし、対人援助で働く際にも役立っていると感じている。

人間福祉学科 平成30年3月 卒業生

防災リーダーを経験した卒業生が対人援助職として現在、防災意識を持っているのか、研修がどのように活かされているのかという点では、専門職として、防災訓練に参加したときに、被災地に行ったことで、備えを伝えることができていることがわかった。意識的に日頃から防災の視点を自身の職場で、周囲に備えることの必要性を伝えたい、もしものときのことを考えたりできているという点で、防災力は格段に向上しているのではないかと思える結果であった。地域の方々に伝えることを1年間体験した学生防災リーダーは、実際に研修で学んだことを対人援助職として積極的に伝えることができていることに、教育の効果を見ることができると考えている。

初期プログラムは1年目の研修とはいえ、おおむね所期の目的を達したと考えている。

## 2章 2年目（平成29年度）の組み立てと実施報告

### (1) 平成29年度の研修プログラム

初期プログラムの組み立てと実施をとおして、研修先とのつながりができ、平成29年度への課題も見えてきた。平成28年度の研修内容を活かし、2年目（平成29年度）の研修プログラムを組み立てるときに、①研修の発展性、②学生への事前指導、③地域での発表で伝えるテーマ、④本学のある地域での発表場所、⑤対人援助職に就いている卒業生の研修参加の設定を考えることにした。

2年目のプログラムを作成する際に、前回と違う①～⑤の視点を入れて組み立てることにした。以下、前回と違う要素となる項目に、前述の①～⑤の番号を付け、あわせて太文字として一覧しておく。

【年間スケジュール】

月	日	実施計画
4月	5日	1年生を対象とした総合オリエンテーションにて昨年の事業内容を報告し、本年度の計画予定を告知した。 生涯学習センター・COC委員会による第1回目の会議を開催（4月25日）。本プログラムの内容と年間計画を議題として語る。
5月	23日 29日	第2回目の会議を経て、防災リーダー2期生の募集、選考基準を共有し、募集活動に入る。 応募者への年間プログラム内容の説明をする。
6月	6日 13日～ 中旬	防災リーダー2期生を決定する (生涯学習センター・COC委員会で選考した6名を決定する) 学生6名によるボランティアのプログラム内容の検討。 なお、この検討には前年度の防災リーダー1期生も参加する。実施内容の継続性を維持するためである。…② 特別養護老人ホーム勤務の卒業生2名が参加を並行して検討する。…⑤
7月	上旬 19日 中旬	宮城県東松島市、矢本はなぶさ幼稚園・宮城県石巻市雄勝町、特別養護老人ホーム雄心苑・雄勝まちづくり協会のカフェ縁・復興まちづくり交流館 中央館との最終の打ち合わせと研修内容を調整する。…① 防災リーダー顔合わせ、研修テーマを伝える。 卒業生の勤務先である特別養護老人ホーム（ヴァンサンク・ヴェルディ八戸ノ里）施設長へ本学の被災地研修の主旨を伝え、卒業生としての参加を依頼する。…⑤
8月	28日～ 30日	被災地ボランティア研修（2泊3日） 一日目 宮城県東松島市、矢本はなぶさ幼稚園の園長先生と先生による被災した当時の取り組みについての研修。 二日目 石巻市立大川小学校視察。宮城県石巻市雄勝町、特別養護老人ホーム雄心苑での施設長による震災当時の話と研修。雄勝まちづくり協会のカフェ縁の震災後の取り組みについての研修。女川町に行き、復興の進行状況を視察する。…① 三日目 復興まちづくり交流会館 中央館にて復興の進行状況を把握し、館長よりまちづくりの展望と課題について聴取。…①

9月	下旬	東北研修の3日間の活動内容を再生し、記録化する。交流の具体的議事録と取材内容の明文化、および撮影写真やビデオ等の編集再生作業を含む。
10月	11日 18日 24日	湯里小学校区の防災訓練の夜間避難訓練に参加する。…④ 湯里小学校区の防災訓練の打ち合わせに参加する。…④ 作成したパワーポイントによる発表の調整、準備をおこなう。
11月	2日 7日 12日	作成したパワーポイントによる発表練習を実施する。 作成したパワーポイントによる発表練習を実施する。 湯里小学校区の防災訓練時に本学の防災リーダーによる発表。(参加者263名)(於:湯里小学校体育館) …④
12月	終日 7日 8日	大阪ほっとコミ19号の執筆編集作業を行なう。 クレオ大阪「ハッピー・サンデー」打ち合わせする。 特別養護老人ホーム ヴェルディ八戸ノ里で施設職員を対象とした防災リーダーによる発表とグループワーク研修に参加。(参加者50名) …④、⑤
1月	20日 21日	地域福祉セミナー「ハッピー・サンデー」(クレオ大阪南)のリハーサルをおこなう。 地域福祉セミナー「ハッピー・サンデー」(クレオ大阪南)でのセミナーを開催し、学生6名による研修内容の報告会を持つ。その他に、防災リーダーのデモンストレーションでは、映像や資料を使用し、体験談を地域の皆様へ発信した。(観客約100名) …③、④
2月	18日 20日	特別養護老人ホーム高秀苑でつないでいこう!介護の輪にてポスター発表と交流会に参加する。(出席者50名) 介護老人保健施設オアシスで、防災リーダーによる研修内容の発表。(出席者50名) …③、④
3月	27日 20日	特別養護老人ホームヴァンサンクボヌールで防災リーダーによる発表。(出席者20名) …③、④ 「大阪ほっとコミ」19号発行。防災、東北からのメッセージp6～p14 次年度の活動の立案と計画。

【被災地研修プログラム内容】

研修日時：平成29年8月20日から22日（2泊3日）

場 所：宮城県仙台市、石巻方面

1日目（8月28日） 宮城県東松島市、矢本はなぶさ幼稚園

2日目（8月29日） 石巻市立大川小学校・宮城県石巻市雄勝町、特別養護老人ホーム雄心苑・雄勝まちづくり協会のカフェ緑・女川駅の復興状況の視察

3日目（8月30日） 復興まちづくり交流会館・中央館

学 生：総合保育学科2名・人間福祉学科2名・現代生活学科2名の合計6名を学生代表の防災リーダーとした。

卒 業 生：特別養護老人ホームヴァンサンク東住吉・ヴェルディ八戸ノ里に勤務する卒業生2名

参 加 者：学生6名、卒業生2名、本学教員2名の合計10名での研修となった。

## (2) 研修実施報告

### ①研修の発展性

1年目(平成28年度)の研修後に、どのような内容を伝えて活動したのかを、研修先に伝えるために、大学で作成しているミニコミ誌「大阪ほっとコミ」17号(B4判16頁)<sup>2)</sup>と大阪での発信活動をまとめたパワーポイントなどを渡した。学生防災リーダーがどのような活動を具体的にを行ったのかを報告するためである。これと同時に、2回目のプログラム作成を並行して実施した。

2年目(平成29年度)には、女川町の駅前の視察や、復興まちづくり交流会館・中央館、雄勝まちづくり協会のカフェ縁を研修先として、復興と町づくりをプログラムに加える調整をした。被災地が、どのような復興の過程をたどっているのかを見ることも大切ではないかと、初期プログラムの実践をとおして感じたからである。別の言い方をすれば、地域の方の声を聞き、目で確かめる研修が必要であると考えたのである。

女川町の駅前の視察では、「あたらしいスタートが世界一生まれる町へ」を掲げ、整備が進んだ駅前で震災前、震災後の駅前の変化を見学することができた。復興した女川駅は新しいまちのシンボルとして駅と温泉温浴施設「ゆぼっほ」が一体となった施設になっている。駅を中心ににぎわいの拠点があり、公共施設や商業・観光施設などを集めた、コンパクトな市街地形成を目指している。実際に女川駅前には商店がたくさんあるが、少し行けば何もない。駅前とは違いまだ復興できていなく工事が続いているのが信じられない程であるが、駅前だけを見ると復興が進んでいるのがわかる現状を女川で見学することができた。まだ復興していない町との違いや、復興していく町の姿を感じることができたのではないかと思う。

女川は被災の体験を踏まえ、山を切り崩して高台に住居を移す準備が進められている。「あたらしいスタート」は町全体の変貌を意味していた。

また、石巻の復興まちづくり交流会館・中央館では、東日本大震災で、人的な被害が大きかった石巻市街地の現在の姿と震災前の姿を比較することができる施設であった。復興まちづくり情報交流会館がなぜあるのか、県外から来た方にも、復興が進んでいるのがわかることも必要だが、住民の方たちに復興がどれだけ進んでいるのか、目で分かるように、模型やパネルで伝えている。館長のリチャード・ハルバーシュタット氏から、東日本大震災で犠牲者となったすべての方たちへの追悼と鎮魂の思いとともに、まちと震災の記憶をつたえ、生命(いのち)のいとなみの杜をつくり、人の絆(きずな)をつむぐという理念のもと、石巻南浜津波復興祈念公園が2020年に完成することや、

津波の被害が大きかった石巻では、防潮堤を必要とする意見と、それとは反対に海が見えなくなるさびしさから、現在でも住民の意見が分かれていること、復興住宅のマンションの1階は、共有スペースとなっていて、人の住む場所にせず、駐車場や倉庫、店舗にしているという、津波被害を受けた石巻での住宅復興の工夫を知ることができた。

雄勝町は、リアス式の地形で、津波で壊滅的な被害を受けた町である。人口も震災前より7割減少し、1,000人以下になり、なかなか道路や住宅の復興が進んでいないようでした。海側の道路には、6年経った今でも、東日本大震災の恐ろしさを物語るようなガードレールが曲がった状態で置かれており、土のうが積まれていた。山側では居住スペースを作る工事が行われていた。その様子を見ながら着いた「カフェ緑」では、NPO法人雄勝まちづくり協会の畑山 泰賢氏から、お話を聞いた。

甚大な津波被害を受けたこの町は、公民館も流されてしまい、津波の恐ろしさを経験し泣く泣く、生まれ育った町を離れた人たちが、地元に戻って来られる場所が必要であることを知った。自分の生まれ育った場所に戻って、地域の人々が集まることのできる場所があるとの思いからできたコミュニティの場所であると教えていただいた。ここでは、食事やお茶を飲んだり、趣味を楽しんだり地域の人たちがつどえる場所として機能している。

ここの地では、人の心をつなぐ祭りの復興が早かったそうで、それには、地域交流が大切で地域の方たちが望まれていることを、地域でどのように取り組むのかが必要があるとのことであった。

震災から6年が経過した2年目の研修地で、その場所で生まれつつある人と人との絆の輪のひろがりや元どおりにはならない変わりゆく町の姿を感じとる研修になった。

## ②学生への事前指導

初年度は、私自身も初めての土地でもあり、なかなか学生の研修に行くまでの事前指導が土地勘もなく、被災地の方々との接点もないままでの難しさがあった。事前指導としても学生に何も伝えることができなかつたのが現状であった。みたまま、感じたことを得てくるのも大切ではあるが、その点では指導不足であったと感じる。

今回は、2年目で被災地の方々との接点ができただけ、事前に電話で、被災地の復興状況など情報を得て、学生に伝えることができた。そこで、大阪の人たちに伝えるには、同じテーマで研修し、内容をまとめるほうが伝わりやすいと思い、「被災地からのメッセージ」で被災地の方の声を聞き取ってくることを学生と事前に話をして決めた。

防災リーダー2期生には、事前指導で初年度より、丁寧に被災地研修に行く前に事前情報を資料や前年度の防災リーダーのまとめを提示して、指導するようにした。その際に、自分が研修に行く場所の情報は事前に調べてから現地研修に参加することを伝えた。記録方法については、写真撮影や自己にて記録すること、必ずひとつは研修先ごとに質問は考えて、研修に望むこと等を指示した。

### ③地域での発表で伝えるテーマ

初年度に被災地の方々と話をする中で、心に残る、大切な言葉があり、そこには災害時に想定しておく、被災地の方だからこそ言える教訓がある。防災リーダー2期生には、事前に「心に残ったメッセージ」をテーマとして与えて現地研修へと向かわせた。現在でも心の傷が癒えることのない人や語ることが難しい方もたくさんいる中で、現地の方たちは、災害が起こったことを風化することなく伝えることにより、防災意識が向上するのであればと、語っていただいた内容である。そのメッセージを聞き逃さないように学生に伝え、後日内容をパワーポイントにてまとめて発表することにした。以下は、研修参加学生が、それぞれのテーマに従ってまとめた防災のメッセージである。

#### 「津波が来ると思わなかった」「一時避難のつもりだった」

大川小学校を見た時、この町に何があったのか津波の恐ろしさを感じました。

地域の皆さんが口をそろえて「津波が来ると思わなかった」「一時避難のつもりだった」と言われていました。いつか大阪にも地震が来ます。「いつか準備する」「関係ない」ではなく、今日から意識を持って行動していくことが大切だと知りました。

#### 「自分の家族のことがあるのに何より一番に園児のことを考えなければならない。今回に関しては、自分の子どもを優先できない嫌な仕事だと思った」

矢本はなぶさ幼稚園の先生が「自分の家族のことがあるのに何より一番に園児のことを考えなければならない。今回に関しては、自分の子どもを優先できない嫌な仕事だと思った」という言葉に、保育士として同じ場面に遭遇した時に私はどのように行動し、園児を一番に考えられるのかと、とても考えさせられました。

阪神淡路大震災の後に生まれ、実際に地震で被災した経験のない私たちが、地震がおこってから「こうしておくべきだった」「こうすればよかった」と後悔するのは嫌なので、「やりすぎ」「大げさ」と言われるくらいもっと身近に防災の意識を持つべきだと感じました。

#### 「SOSはどう送られたか？」

この言葉は、宮城県の雄心苑という介護老人施設へ行き、施設長さんからお話を聞いたものです。災害が起きたのは3月11日で、どんな時期に起これば良いというわけではありませんが、夏だと食品が傷んでしまい、食中毒になってしまう恐れがあるので、非常に怖かったと話されていました。時期は雪が降っている頃で、その心配はなかったそうです。また、浜辺には、多くの魚があがってきていて、それを拾い集め調理をしていたそうです。多くの利用者があるので、食料品や生活用品が足りなくなり、支援物資が届くのを待っていたそうですが、いつまで待っていても施設には届かず、助けてほしかったのでシーツをマジックで塗り、SOSの文字を作ったと話されていました。そして、自衛隊やボランティアの方にきづいてもらい、支援物資が届いたそうです。

支援物資で人気があったものは、食料品（おにぎり、パン類、カップ麺、飲料水や粉ミルク）、生活必需品（毛布、ラジオ、乾電池、懐中電灯、ウエットティッシュ）だったそうです。

被災直後の小さな子どもや、お年寄りの方などの心を癒やすことのできるカウンセラー的な役割を担う人材の育成も必要なのではないかと思います。保育士や介護福祉士がその役割を担うべきだと思います。

#### 「人を助ける前に自分も生き延びること」

この言葉は雄心苑の施設長の原律子さんからのメッセージです。

人を助ける前に、自分の周りの安全を確認してから、人を助けに行くことの大切さを教えていただきました。今後、災害が起きたときには、この言葉を思い出して行動したいとおもいます。

#### 「自分が助かることはずるいことではない」

人が被災していたら助けるのが、人の心です。しかし、自分の命が助かる保障もないのに、その人を助ける行動を起こしたら人的被害は、拡大するばかりです。

まず、自分の命の保障が先決です。ひとつのエピソードを紹介します。

夜道で人が倒れている場面で、誰もその人を助けたいという気持ちになりますが、ひとりでその人を助けることはしてはいけません。なぜならば、逆に襲われたというケースがあったのです。状況を判断するのは非常に難しいことですが、自分あつての救助だと思えます。

#### 「備える心、備える頭をもっておく」

この言葉は、東日本大震災を体験したからこそ、私たちに伝えてくださった言葉だと感じました。私たちが伝えたいことは、いつ起こるか分からない地震を日頃から色んな場面を想定し、その時、どう行動すればいいのかを事前に備えることが大事です。

たとえば、通学通勤中、トイレや入浴中、1人でいるとき細かい所まで、あらかじめ対応を考えておくだけでも、混乱を起こすことは少なくなります。

心と頭の両方で備えることが、自分を守り、多くの命を守ることに繋がると思いました。もし、今日の帰り道に大地震が起きたらどうしますか？

被災地の方からのメッセージとしてまとめることで、伝わり方として心に残る言葉となり、防災意識の大切さが地域の方々に分かりやすく伝わったのではないかと考えられる。

発表をパワーポイントにまとめる際には、卒業生に参加してもらい社会人としての意見もとり入れてまとめた。



#### ④本学のある地域での発表場所の設定

地域の防災訓練に参加をし、地域の人々の取り組みを知った上で、ともに防災を考えることができる必要があるのではないかと思い、地域の湯里地域総合防災訓練の会議に参加し、湯里連合振興町会の会長へ学生の被災地研修の発表の機会について依頼した。早速、快い了解を得、発表場所を設定していただいた。本学のある湯里地域の方々に、現在、取り組んでいる防災教育を伝える機会的一端となった。湯里地域総合防災訓練に学生防災リーダーが参加することにより、本学が位置する地域の方々と、大規模災害が起こった際の共助の心を育み、交流の機会を重ねることが、地域防災の大切な要件といえる。

#### ⑤対人援助職に就いている卒業生の研修参加

対人援助職に就く学生への防災教育の発信という視点から、対人援助職に就いている本学卒業生が参加することで、学生の学びの視点が伸びることを期待した。卒業生の働いている特別養護老人ホームの施設長へ現地研修への参加の主旨をお伝えし、卒業生も一緒に現地研修してもらうことで、さらに被災地で学んだ具体的な防災の視点を深めることと、職場を中心としたコミュニティに持ち帰り、広めてもらうことを期待した。多くの高齢者は、災害時には災害弱者となる方たちであり、リスクマネジメントの視点として、防災意識の向上も考える契機となると思い計画に組み入れた。

下記は、被災地研修に参加した卒業生2名の事後の感想を摘記したものである。

- ・被災地研修に行き、実際に経験した人から体験談を聞くことは大切だと感じた。
- ・今まで施設での防災訓練はしていたが、危機感や恐怖はあまり感じずに参加していたが、今回の被災地研修で大規模地震を経験した方のお話を聞かせてもらい、恐怖感や危機感を持つことができた。
- ・自然災害が起こった際に、高齢者の方々をどのような順番で避難してもらうのがよいのかも考えておく必要があると思った。
- ・もしも、自然災害が起こった際は、高齢者の方の不安な気持ちに寄り添い安心できるように支えたいと思った。
- ・自分の働いている場所は、津波は来ないと思っているが、火災には注意が必要だと感じていて、自然災害が起こった際の自分がどのように行動したらよいのか、イメージしておくことが大切で、防災について以前より、真剣に考えるようになった。
- ・今まで大阪はあまり災害が起らないと思っていた。防災意識が低かった。しかし、今回の防災研修に参加して、はじめて、特別養護老人ホームが避難所になりえるのだということを知った。そのことは頭になかった。地域の人の食料までは考えていなかった。
- ・自分の施設の備蓄があるかの確認をした。どこに備蓄しているものが置かれてるのかも知らなかったため、現地研修後、場所を確認し3日分の食料は備えてあることを知った。

- ・山形県の数箇所の施設が一時避難の受け入れをしてくれるようになった時の利用者の振り分けも、介護職員さんで利用者の仲のよい方同士でいけるようにとの気配りに感心した。
- ・特別養護老人ホームの雄心苑では、家族を亡くしても利用者を支えること、「大丈夫よ」と声かけをおこなっていた職員の方々の責任感の強さに感心した。
- ・防災について、勉強会や研修で考える場を作ることが大切だと思った。

防災については、施設での日常業務に追われているためか、危機感をもって対処することが少ないようである。今回、参加した2名の卒業生は、現地での話を聞く中で、専門職として災害が起こった際に、どのように行動ができるかを一番身近に感じ研修に取り組んでいた。特別養護老人ホーム雄心苑が被災したときに、当時どのようなマニュアルがあったのかや、利用者の状況について細かく専門職の視点で施設長へ質問することのできたのは、研修での大きな収穫となったようである。また、雄心苑の現在の防災マニュアルについてもご教示いただき、記録として持ち帰ることができた。

### 3章 対人援助職としての防災意識

今回、2章の⑤にも記述したとおり、卒業生が現地研修に参加した。もし、大阪で災害のあったときには、おそらく多くの施設が避難所になる可能性もあり、災害弱者をかかえる施設の防災対策が、急務である。同行した対人援助職に就いている社会人卒業生が、今後の大きな発信源になることが期待される。

被災地の災害時の対策や心構えを対人援助職の視点で考え、まずは学生自身が防災意識を持ってもらうことが重要である。日頃から、リスクマネジメントを考え、備えておくことが、災害弱者となる高齢者が生活している特別養護老人ホームでは必要になってくる。そこで、本プログラム研修の内容を卒業生の勤務先の施設長へ伝え、今回の現地研修に卒業生が参加することができた。

以下の記録は、2名の卒業生が勤務するそれぞれの施設長に取材し、今後の防災対策に関する考え方をとりまとめたものである。

- ・日常をどれだけしっかり利用者を支えられているかで、非常時の対応も考えることができる。福祉職として介護するだけでなく、より広い視野から活躍できる場を知ってもらいたいという思いである。まず、経験が大切であり、外に出て研修する機会を提供し、心の変化にも期待している。自分が介護を仕事にしている誇りをもってもらいたい。
- ・他者を思いやれること、助け合える防災意識を持つことが、組織として、施設として財産になると思っている。施設としてできることは、研修に参加する費用を負担することぐらいである。
- ・大規模災害への対応は、手順やマニュアルだけでは対応できないものである。想定を超える災害での対応は、最後は人間力だと考えている。様々な立場の人々が災害にあうと、その人が何を思い、感じているかの判断はその時々には迫られる。それができるようになるには、直接、被

災地に赴き、被災者が何を求め、何に困っているのかを肌で感じることである。それが、相手に共感する力となり、災害時にはマニュアルを超えた判断ができるようになると捉えている。

実際に被災地に行かないと得られない経験を、働いている職場でどのように活かせるか、これが施設長が共通して持っている期待度といえる。介護の仕事に幅をもたせ、組織人として災害に備える感性を磨くことへの期待ともいえる。このような組織（施設）が行政区を中心に広がってゆけば、都市としての防災がより磐石になっていくものと思う。

さて、今回の研修をふまえ、筆者らは、卒業生を参加させた施設2ヶ所での報告会を設定した。限られた時間であったが、施設の多くの職員の聴講があった。次の所見は、施設長が聴講者の代表をして寄せられたものをまとめたものである。

・施設内研修で防災の発表を聞き、施設が避難所になることがあることを知り、現在は福祉避難所にはなっていないが、地域住民の受け入れることのできる体制を整えなければいけないと思っている。昨年から防災委員会を再構成し、一般的な火事だけでなく、大規模災害を想定した防災対策や備蓄品の拡充などを研修参加職員の意見も交えて取り組んでいる。また、研修先の被災地では、地域住民の避難や支援を果たされていたことの報告を受け、施設内だけでなく地域住民への支援もできる拠点づくりにも段階的に取り組んでいる。

最後に、施設が、防災研修に望むことなど、今後の展望に該当する取材内容を摘記し、本稿をむすぶこととしたい。

#### 今後の防災研修と施設としての展望

- ・防災研修に参加した職員から大規模災害への対策委員会を立ち上げるときの、中心的な人材へとってもらいたい。
- ・施設のマニュアル、ガイドラインの作成に役立てたい。実際に、困ったこと、必要物品、食事の提供や食事形態への対応を日常の業務にもヒントを得ながら検討してみたい。
- ・地域の方々との交流できることを考えている。ひとり暮らしの高齢者の方が施設の周囲にもたくさんいる。防災の研修の機会を設け、高齢者の方々を外に出てもらえる場所を提供したい。
- ・施設の職員の中には、自分たちのやっていることを発表したい気持ちがある。科学的に介護を捉えてアプローチできる方法のひとつとして防災の意識を取り入れて考えたい。職員の成長にもつながると感じている。

本稿では、防災研修に介護職員（卒業生）を加えることで、地域へとつながる防災教育のシステムづくりが広がり、意識の高い防災行政区への成長が描けるのではないか。そのためには、介護施設への研修参加の積極的なはたらきかけや、ディスカッションの場を設定する定期的な試みが必要になってくると考える。もし、この考えをさらに継続的に進めて行けるとしたならば、やがて、防災を視点とした福祉都市学といった新たな学びの実践が現出してくることになるという考え方もできる。

## むすびにかえて

被災地からのメッセージや学びをどのように地域に伝え、防災意識の広がりをもたせることができるのかを考えてきた。その一つは本学の向かいに立地する湯里小学校である。本稿の2章④で記したように、児童、生徒、教職員が、地域ぐるみで非常に高い防災意識をもっている。2年目の研修成果を湯里の地域住民と共有できたことも再度記しておかなければならない。

今後も、プログラムの改善を図り、地域の多くの住民に防災意識を持つことの重要性を伝えるとともに人と人とのつながりを育んでいきたいと考えている。

## 謝辞

本稿の執筆にあたり、特別養護老人ホーム雄心苑 施設長原律子氏、矢本はなぶさ幼稚園 園長山田元郎氏、NPO雄勝まちづくり協会 畑山泰賢氏、復興まちづくり情報交流会館・中央館 館長リチャード・ハルバーシュタット氏をはじめ、宮城県東松山市、石巻市の多くの方々にお世話になった。また、大阪の特別養護老人ホームヴァンサンクボヌール 施設長 山片秀磨氏、卒業生 奥地真穂氏、特別養護老人ホームヴェルディ八戸ノ里 施設長 植北康嗣氏、卒業生 光井真帆氏にも感謝申し上げたい。

## 参考文献

- 1) 長橋幸恵, 対人援助職としての防災教育の視点: 被災地から学ぶリスクマネジメントの初期プログラム, 大阪城南女子短期大学研究紀要, 第52巻, 2018.3, p.49-62.
- 2) 大阪ほっとコミ, 17号, 2017. 大阪城南女子短期大学学生支援委員会発行.

(ながはし さちえ: 講師)